

## 諏訪形の教育関連遺跡を歩く

諏訪形誌を歩く（第3回）

期 日 5月 29日（日）

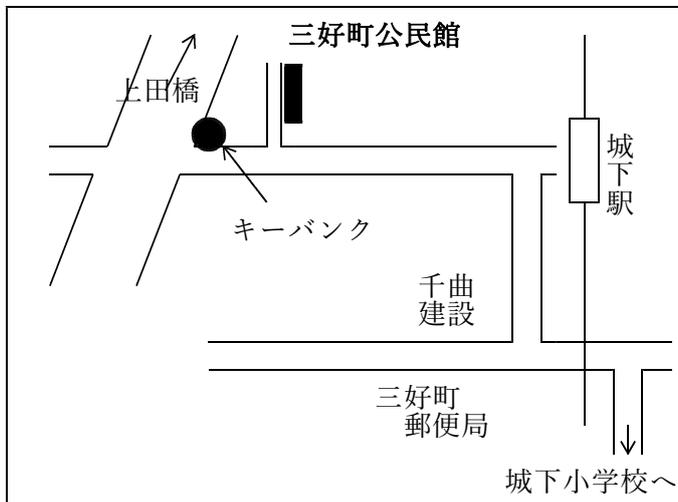
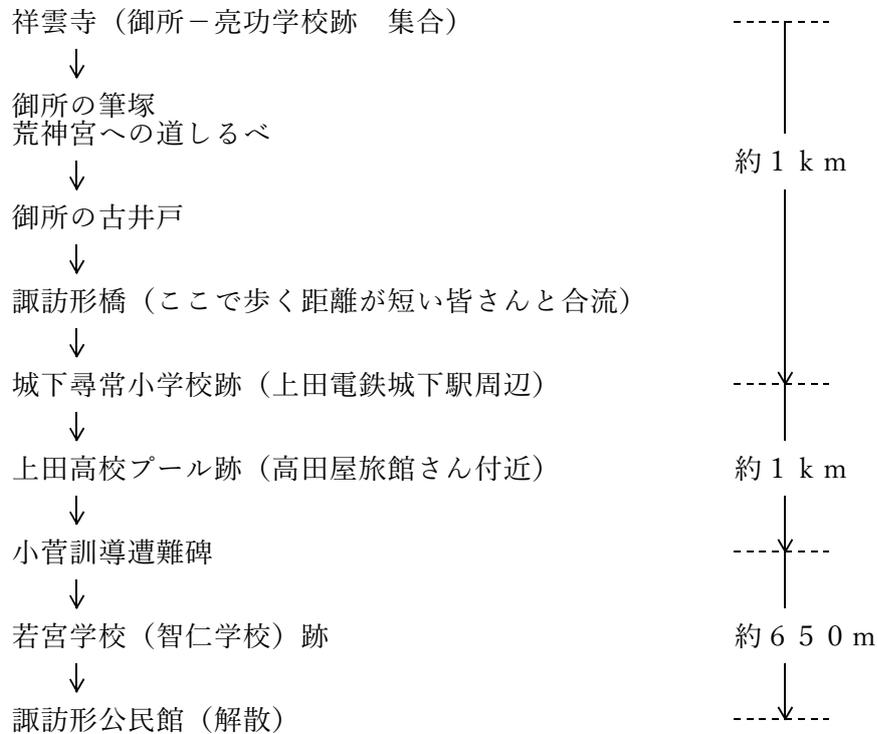
時 間 9時～12時

- ・参加される皆さんは午前9時に祥雲寺にご集合ください。  
※祥雲寺の場所は別紙の「ウォーキングマップ」をご参照ください。
- ・祥雲寺から諏訪形橋まで約1kmですが、歩くのがたいへんという方は10時に三好町公民館前でお待ちください。「諏訪形橋」以降、合流して歩いていただきます。
- ・諏訪形自治会役員が三好町公民館前でお待ちしています。

講 師 諏訪形誌活用委員会 北沢 伴康 顧問  
諏訪形誌活用委員会 柳澤 公一 委員長

行事責任者 稲垣 康史（諏訪形自治会副自治会長）

予定コース



この件についてのお問い合わせ先

稲垣 敦史（諏訪形誌活用委員会）  
Cell-Phone : 070-4154-5189  
E-mail : suwagatashi@gmail.com

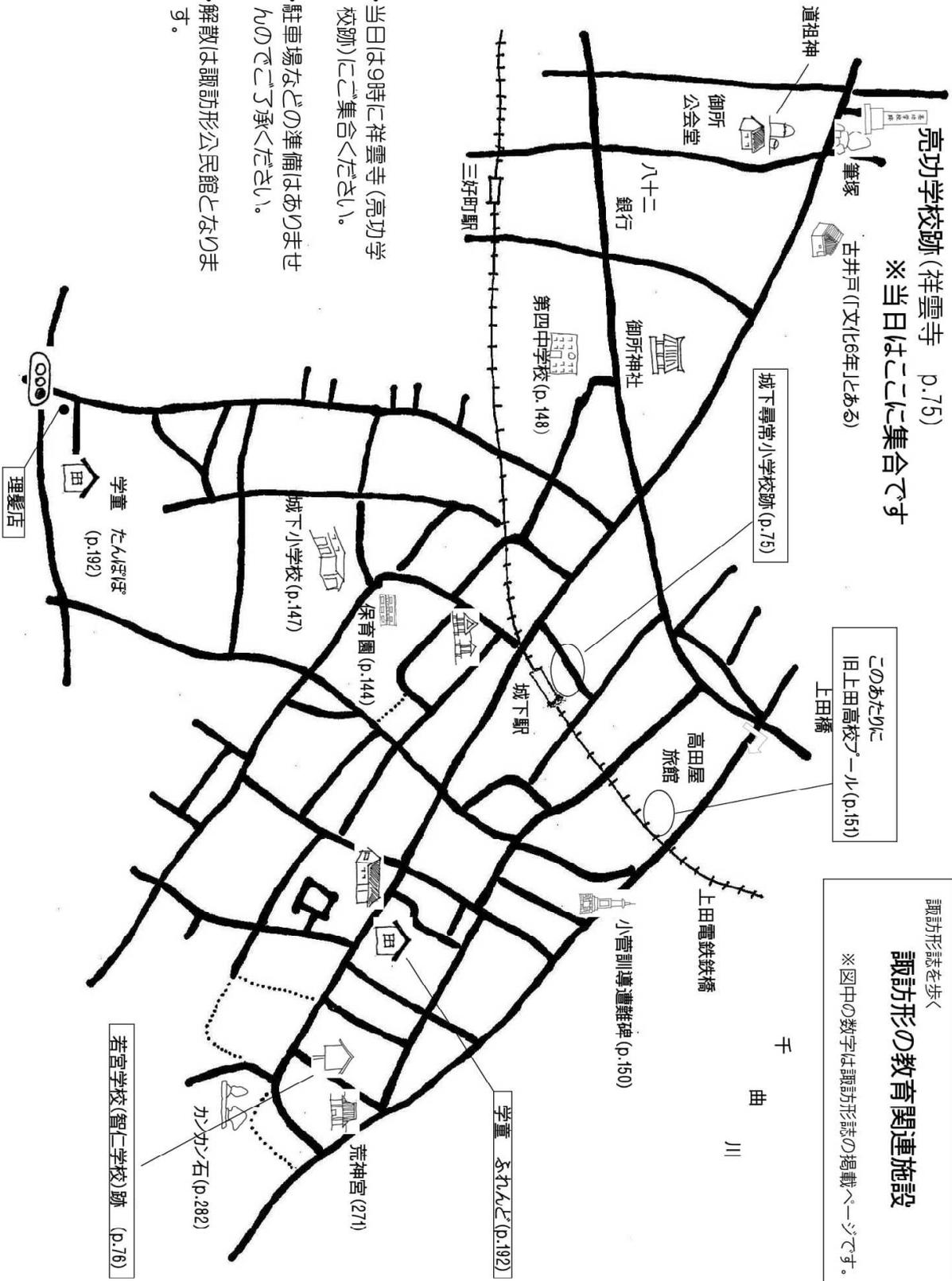
# 諏訪形の教育関連遺跡を歩く 資料

諏訪形誌を歩く(第3回)

亮功学校跡(祥雲寺 p.75)  
 ※当日はここに集合です

このあたりに  
 旧上田高校ゾーン(p.151)

諏訪形誌を歩く  
**諏訪形の教育関連施設**  
 ※図中の数字は諏訪形誌の掲載ページです。



- 当日は9時に祥雲寺(亮功学校跡)にご集合ください。
- 駐車場などの準備はありませぬのでご了承ください。
- 解散は諏訪形公民館となります。

## 祥雲寺

上田市御所の「祥雲寺」は天正年間（1573年～1592年＝戦国時代の終わり近く）に清月和尚の開基と伝えられている古刹です。しかし残念ながら、寛保2年（1742年）の千曲川大洪水、いわゆる「戌の満水」により建物や文献はすべて失われてしまいました。水害の数年後には仮の庫裡兼本堂が建てられたと記録されています。本格的な寺院再建は檀徒の方々にとって永年の悲願でしたが、平成5年（1993年）、ようやく本堂と庫裡が全面改修され、現在の姿となりました。



祥雲寺に寺宝として伝わる「龍の顎の玉（能作生珠二のうさおのたま）」は元禄年間（1688年～1704年）に活躍した高僧、廣岸が雨乞いなどの祈禱の折りに使っていたものとされています。しかし、この寺宝は「戌の満水」で流失してしまいました。ところが、埴科の村人が、千曲川の河原で夜な夜な光る所を見つけ、掘り出してみると桐箱が出てきました。この箱には「祥雲寺」と記されていたため、祥雲寺に届けられたと伝えられています。

明和7年（1770年）には雨乞いのために、藩命によって村役人や郡奉行が参加して祥雲寺で祈禱を行ったとも記録されています。

## 祥雲寺 寺のあゆみ（御所自治会刊『御所のあゆみ』より）

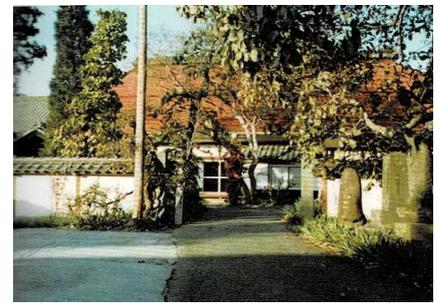
祥雲寺は真言宗の寺で、本山は京都の智積院（ちしゃくいん）です。開山は天正年間、清月和尚によると伝えられています。来歴がはっきりしないのは、別資料でも述べているとおり、寛保2年（1742年）の千曲川大洪水（戌の満水）で堂宇、仏具、資料などがことごとく流失してしまったためです。



鐘馗像

流失の数年後、現在寺がある場所の民家2軒を買い受け、堂を兼ねた庫裡を建設したと記録されています。当時の檀家数は30戸ほどだったことから、寺の再建はたいへんなことだったろうと考えられますが、人々の信仰心の厚さを感じることが出来ます。その後、天保年間（1830年～1844年）には、堂の西側に瓦葺きの本堂と座敷が増築されました。また、大屋根の中央には魔除けとして、鍾馗（しょうき）像が置かれています。これは、この地域では珍しいことで、「二度と災害に遭わないでほしい」という人々の願いが伝わってきます。

現在の建物は平成3年（1991年）に全面改築されたものです。別資料では「平成5年」となっていますが、引用文献から考えて、この「平成3年」が正しいものと思われます。なお、旧本堂前には盆栽風のすばらしい赤松があったけれど、残念ながら移植の際に枯れてしまった、とのことでした。



改築前の祥雲寺

御所自治会刊『御所のあゆみ』より

## 戌の満水とは…

寛保2年（1742年）の千曲川大洪水は、この年が壬戌（みずのえいぬ）の年にあたるため、「戌の満水（いぬのまんすい）」と呼ばれています。信濃国の千曲川・犀川流域では旧暦の8月1日（現在の暦では1742年8月30日）の被害が特に大きく、流域全体では亡くなった人は2800人を超えると言われます。また、千曲川本流の堤防決壊だけでなく、山沿いの小河川の氾濫なども各所で発生するなど、未曾有の大災害だったと記録されています。上田市秋和の正福寺にはこの時に亡くなった人々を弔うための塚が造られています。

なお、この時の大雨は近畿中部地方にたいへん大きな災害をもたらしました。また、関東地方でも利根川、荒川、多摩川などが一斉に大洪水となり、「関八州全域に被害が及び、田畑の水没流失は80万石に及び」と記録されています。

「戌の満水で関八州に80万石の被害」とはどれくらいの面積を指すのかという疑問がありました。「1石は100坪と言われていた」という話があり、それから計算すると、80万石は250km<sup>2</sup>強となります。ちょっとピンとこない広さですが、これは東京23区の面積の約40%、東京ドーム（のグラウンドの広さの）の25000倍というかなり大きな被害になります。

参考資料 東信ジャーナル社「寺の宝」  
ウィキペディア

## 寺宝「龍の顎の玉（能作性の珠＝のうさしょうのたま）」

「龍の顎の玉（能作性の珠）」は、あらゆる苦を取り除く珠、とのことです。元禄年間（1688年～1703年）に「祥雲寺中興の祖」と言われる「廣岸和尚」が勧進し、祈禱に対して靈験あらたかだったとされています。「戌の満水」で流失したものの埴科郡で発見され、箱書きから祥雲寺に返されたと伝えられています。

この珠は秘宝とされており、現在の祥雲寺住職の奥様も見ることがない、とのことですが、御所自治会発行の『御所のあゆみ』には写真も掲載されており、「今まで非公開だった」と記載されています。

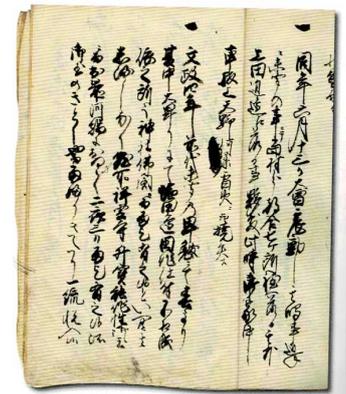


## 祥雲寺と雨乞い（御所自治会刊『御所のあゆみ』より）

大干ばつの際、藩命によって祥雲寺に小泉組（室賀、小泉、上田原、築地、神畑、下之条や城下地区の11ヶ村）の村人や村役人を集め、奉行も参加して雨乞いを行ったという記録が何回かあります。伊勢社（御所神社）に残された『山神大権現講中』には次のような記載があります。

文政四年、前代未聞の干魃にて春より夏中大旱りにて塩田辺田作仕付相ならず、之に依りて処々神社仏閣にて雨乞い之有り候といえどもそのしるしなく、然る所、祥雲寺寺宝「能作性」御玉にて出先河端において二夜三日、雨乞い之あり候ところ、御玉のきとくや雨ふりきたり一統悦に入り候。

なお、『御所の歴史』には、明和7年（1770年）と天保7年（1836年）にも小泉組が祥雲寺で雨乞いを行った、と記載されているとのこと。



山神大権現講中

## 祥雲寺と亮功学校『諏訪形誌』 75ページ 「1 初等教育の始まり」

城下地区では明治6年（1873年）、御所村の祥雲寺に「亮功学校（りょうこうがっこう）」が設けられ、中之条村、御所村、諏訪形村、小牧村の子どもたちが通うようになりました。亮功学校が開校した当時、ここに通学した子どもの数は、男子94人、女子60人、合わせて154人でした。しかし、学校へ行けなかった子どもも63人いて、就学率はおよそ70パーセントでした。



## 荒神宮への道しるべ

『諏訪形誌』 273ページ 「コラム 荒神宮への道しるべ」

荒神宮への道しるべが、御所地区の田子のぶ子宅筆塚のそばにあります。昭和二十年代の終わりころ、御所公会堂から県道上田稲荷山線へ通ずる道を消防道路に拡幅工事した際に出土したものを、現在の位置に移転してあります。大きさは、高さ60センチメートル、横幅42センチメートルの丸みを帯びた自然石です。表面には、左手の人差し指で行き先を示し、その下に「くほうしん（＝こうじん）」と線刻されています。

いつごろ造られたものかはわかりませんが、字体から判断して、江戸時代まで遡るものではないかと思われます。御所地区以西の埴科や更級方面からも参詣人があり、その人たちに道しるべとして利用されました。当時の荒神宮信仰が庶民に行きわたっていたことがわかります。



筆塚の脇に置かれている「荒神宮への道標」は昭和20年代、道路工事中に出土したもので、中之条から諏訪形、小牧方面に通じる現在の県道脇に置かれていたものようです。「昔は今以上に荒神さんへの参拝客が多かったから、このような道標が必要だったのでしょ」と『御所のあゆみ』では述べています。

## 筆塚『諏訪形誌』 281ページ 「4 筆塚」

「筆塚」は、寺子屋の子弟たちが師匠を偲ぶために、また使い古した筆などを供養するために建立された記念碑です。幕末から明治初期にかけて、諏訪形にも寺子屋があったことから、「筆塚」があっても良さそうなのですが、なぜか、この地域の「筆塚」は須川の観音堂の脇だけに建立されています。

この塚は高さ1.3メートル、幅1.07メートルの菱形の自然石に雄渾な筆致で「筆塚」と彫られています。碑面には「元治元年（1864年）」の建立年も刻まれています。元治元年と言えば、尊皇攘夷か佐幕かといった激動の時代で、明治維新の四年前の年です。諏訪形の若者たちは、やがてやって来る新しい時代に備えて教養を身につけておかなければ、という熱い思いで勉学に励んでいたのかもしれませんが。このような「筆塚」は小牧と須川御所建立されています。

御所の筆塚は田子家の庭にあります。田子家は代々、眼科医を業としていて、昭和初期までは「真珠散」という目薬の販売も行っていました。また、田子家では当主が代々「田子栄三（えいさん）」を名のり、初代栄三（恭頼）は寛政元年（1789年）から50人あまりの弟子に教えていたと記録されています。2代目栄三（尚廉）は文久元年（1861年）まで300人あまりの弟子がいました。3代目栄三（温廉）は文久2年（1862年）から明治6年（1873年）までに180人の弟子を教育しました。温廉の弟子のだった諏訪形の宮下理兵衛はその後、明治元年（1868年）から明治6年（1873年）まで諏訪形で寺子屋を開き、50人あまりの子どもたちに教えました。

田子家の筆塚は2代目栄三（尚廉）の弟子にあたる上条則重らが、嘉永6年（1854年）に師を讃えて建立したものです。



参考文献：『御所のあゆみ』

なお、『諏訪形誌（web版）』の「諏訪形には「筆塚」はないのか？」も併せてご覧いただけたら幸いです。

## 古井戸

『諏訪形誌』とは関係ないのですが、途中に「古井戸」があります。

御所自治会で設置した説明板によると、この「田玉家の井戸」は文化6年（1810年）2月6日に造られた、と石に彫られている珍しい井戸である、とのこと。また、積み石に柱を立てる溝が残っていることから、屋根付きだったことがわかります。



## 諏訪形橋

『諏訪形誌』 47～48ページ 「4 村内の主要道路の整備（2）城下村の里道の整備」

城下村が管理する道路（里道）の整備も進められました。それらの中には、諏訪形区が管理を受持つ箇所もありました。明治34年（1901年）の記録によると、東組細川銀右衛門、中組窪田光江、小林林治、西組柳澤萬八、須川横林重兵衛がそれぞれ代表を務める地域の里道が整備され、整備費用は総額で166円16銭余りであったと記されています。

城下村の里道整備の過程では、次のようなエピソードも残っています。明治23年（1890年）、最初の上田橋が架設されると同時に、通称「二線路」が竣工しました。この道路の工事の際、ニヶ村堰にかけられた橋の名前が「諏訪形橋」とされたことに対し、当時の御所区から「橋が架けられた場所は大字御所なので、橋の名称を変更してほしい」という、次のような嘆願書が県知事に提出されました。



↑現在の「諏訪形橋」付近ですが昔の面影はありません

### 橋名御改称願

小県郡上田町ヨリ東筑摩郡松本町二達スル第二線路工事竣工ニ付開道式御挙行相成候処上田橋ノ南方ニ至ル橋名之儀諏訪形橋ト名称セラレシ候得共該橋梁ノ地籍ハ大字御所ニシテ字赤岩ト糠田トノ間ニ架設セラレタルモノニシテ大字諏訪形ニハ毫モ関係コレナク然ルニ無縁故ノ大字名ヲ以テ橋名トセラレ候節ハ将来歴史上影響ヲ及ボシ且ハ地籍上紛議ヲ生ジ候ヤモ計リ難ク候間御詮議ノ上御改称相成リ度連印ヲ以テ此段願イ奉リ候也

明治二十三年四月三日

御所区長 柳澤儀八  
同伍長総代 田玉逸作  
諏訪形区長 細川吉郎

長野県知事 殿

『御所村の歴史』より引用

この場所は現在の大字諏訪形（新井地籍）と大字御所との境界に接していますが、図面上ではあきらかに諏訪形分と判断できます。『三好町史』によると、昭和18年（1943年）に描かれた三好町商店街の図面にはその橋の名前が「諏訪形橋」となっているため、橋の名称変更願は取りあげられなかったものと思われます。また、橋名の変更願いに諏訪形区長の名前がありますが、どのような事情があったのかはわかりません。

なお、昭和45年（1970年）に三代目の上田橋が完成した時に国道143号が拡幅整備され、「諏訪形橋」も撤去されました。ニヶ村堰の水路は国道の下に地下道とともに整備され、現在に至っています。

### 最初の城下小学校『諏訪形誌』 76～77ページ 「2 城下尋常小学校の開校」

明治19年（1886年）4月になると新たに「小学校令」が公布され、6歳から14歳までの間に4年間、義務教育として尋常小学校で学ぶことになりました。また、「小学校令」によって、諏訪形、小牧、御所、中之条等の七つの村が一つの学区となり、諏訪形村の「若宮学校」は御所村の「亮功学校」や上田原村の「弘教学校」等と統合されて「中之条学校」となりました。校名は「中之条学校」になりましたが、校舎はそれぞれの学校にあったものをそのまま使っていました。

明治22年（1889年）の「市町村制」施行によって城下村が誕生すると、旧「若宮学校」を本校、旧「亮功学校」を支校とする「城下尋常小学校」が開校しました。また、旧「弘教学校」は上田原村に移って「川辺尋常小学校」となりました。



次の年の明治23年（1890年）には、本校と支校に分かれていた「城下尋常小学校」が、城下村のほぼ中央にあたる諏訪形の新井地籍（現上田電鉄城下駅西側一帯）へ移転し、新校舎が建設されました。これによって、「城下尋常小学校」の本校であった以前の「若宮学校」と、支校であった以前の「亮功学校」はなくなりました。

諏訪形区は城下尋常小学校建設にあたり、金60円（現在の金額だとおよそ120万円）の寄付と、人夫延べ147人を提供しました。これに対して、明治27年（1894年）、諏訪形区は長野県知事から感謝状と木盃一個を授与されています。その後大正11年（1922年）、城下尋常小学校は諏訪形928番地に移転し、現在に至っています。

参考文献『学校誌しろうした』

## 上田高校旧プール跡

『諏訪形誌』 151～152ページ

「6 長野県立上田中学校（現上田高等学校）プール」

昭和5年（1930年）、上田中学校では生徒の体位向上などのため、水泳部が創設されました。創設当時の練習場所は千曲川などであったため、十分な練習ができませんでした。このようなことから、昭和8年（1933年）、プールを建設するための「水泳場建設委員会」ができ、学校に近い適当な用地を探しました。その結果、諏訪形の堀尻地籍（現高田屋旅館東側）の民有地と一部市有地あわせて約300坪（約10アール）の土地が使えることになり、同窓会が借り上げて、プールが建設されました。

プールの大きさは、東西25メートル、南北15メートル、深さ1.15から1.45メートルで、付属建物として管理人室、脱衣所、トイレなどが整備されました。また、敷地北東の隅に井戸を掘り、一馬力のモーターポンプ室が作られました。プールの水量は約530立方メートルで、このポンプでいっぱいにするのには、ほぼ一昼夜かかりました。



↑ プールがあった場所は現在では住宅地となっていて、往時の面影はありません。



故窪田作美さん（窪田善雄自治会長の父上）が当時の上田中学校水泳部に所属しておられたとのことで、上の写真を提供していただきました。なお、これらの写真は『諏訪形誌（web版）』に掲載されています。

このプールは同年7月21日に竣工式を迎えました。プールの建設にあたっては、上田中学校の生徒たちが資材の運搬をすべて行うなどのこともあって、短期間で完成することができました。水泳部の生徒たちは、好条件のもとで十分な練習ができるようになりました。また、水泳部の練習がない日には、上田蚕糸専門学校（現信大繊維学部）や、小県蚕業学校（現上田東高等学校）の学生生徒、近くの尋常小学校の子どもたちや、地元青年団員、体育協会の許可証のある者なども、プールを使用することができました。戦中や戦後の一時期には、主に東北信の旧制中等学校（現高等学校）対抗水泳大会が開かれ、プールサイドには各校のテントが張られて、選手を応援する声援が遠くまで聞こえるほどの盛り上がりでした。また、諏訪形や三好町の子どもたちは時折、夜間にこのプールで水遊びをしていて、管理人から注意されたこともありました。

昭和40年（1965年）、上田高等学校の敷地内に本格的なプールが完成し、このプールの役目も終えて、昭和43年（1968年）には廃止となり、長野県教育委員会へ引き継ぎました。現在では、この場所は埋め立てられて住宅が建ち、当時の面影はどこにもありません。

このプールの脇に上原和子さんという管理人が住んでいる建物がありました。諏訪形誌活用委員の阿部和子さんは「ここによく遊びに行った」と話してくれました。阿部さんは小学生だった頃にこのプールで泳いだことがあるそうです。今井洋幸さんも「管理人の方が親戚にあたる方で、時々遊びに行った」と話してくれました。

# 小菅訓導遭難事故と小菅訓導殉職記念碑

『諏訪形誌』 150～151ページ 「5 小菅訓導殉職記念碑」

北浦地籍（諏訪形水防庫東側）の千曲川堤防沿いに、小菅訓導の殉職記念碑が建立されています。この碑は、白壁づくりで、高さは避雷針部分を除いて10.55メートルです。

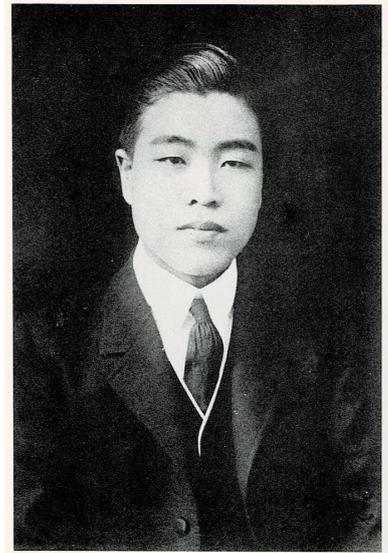
昭和4年（1929年）4月24日、遠足帰りの上田市尋常高等小学校本校部（現第二中学校）の一部の生徒たちが、近道をするために中洲に架かっていた仮の板橋を渡り始めました。引率の教師が注意をした矢先、ひとりの生徒が誤って水かさの増す千曲川へ転落し、流されてしまいました。これを目撃した引率の教師のひとり、小菅武夫がすぐさま救助に向かい、やっとの思いで生徒を助け同僚に託しました。しかし、小菅は疲労と雪解け水の強く冷たい水流によって岸辺にたどりつけずに水中に没してしまい、翌日、変わり果てた姿で発見されました。享年23歳、教師になって1か月足らずでした。



我が身を犠牲にして教え子を救ったという行為に対し、上田市をはじめ各地の多くの教育関係者、市内の新聞社三社などが中心になって広く義援金を募り、殉職現場近くの千曲川河畔に殉職記念碑を建立して、永くこの偉業を後世に伝え、現在に至っています。

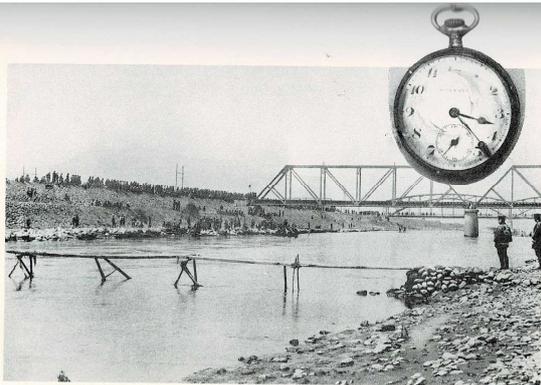
殉職記念碑の構造は基壇部を除き躯体はコンクリート、モルタル塗装洗い出しという工法で作られ、三段づくりに構築されています。初段の基壇部は高さ2.7メートル、幅2.7メートル、御影石積み、正面

には武夫が昭和4年（1929年）3月に、上田青年誌に寄稿した「本願晩鐘」の最初の部分が、銅版に刻まれ、はめ込まれています。また、右側には建立に至った経緯が銅版で、背面には工事請負い業者二社の名前を黒御影石板上に線刻したものがそれぞれはめ込まれています。中段部分の正面には、灰黒色の石板に、東京文理科大学（現筑波大学）教授文学博士中山久四郎による、900字にも及び殉職に至った経緯を記した文章が線刻されています。上段は直径1.58メートル、長さ3.6メートルの円筒形で、正面には一辺40センチメートルの正方形で灰黒色の石板6枚に、正三位勲一等学習院長荒木寅三郎が、力強い書体で「嗚呼小菅訓導」と揮毫をしたものがはめ込まれています。



君 夫 武 菅 小

小菅武夫の墓は上田市新町の向源寺にあり、墓碑の形は殉職記念碑をミニチュア化したものです。また、小菅武夫については「小泉上田教育会館」内の「信州上田ふるさと先人館（入館無料）」でも紹介されています。

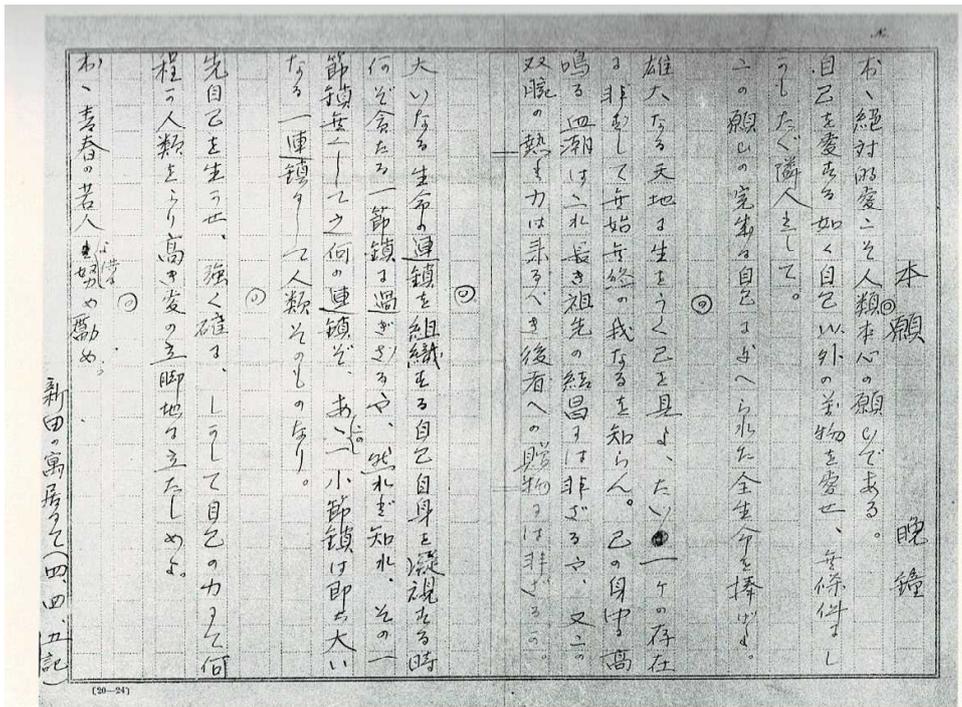


東 掘 (平時一後午日五十二月四年四和昭) 品 留 遺 (のもるたり止てし示を部利の備遺)



(日四月五年四和昭) 儀 葬 校

殉職記念碑『本願』の原稿



(のもるせ密に誌年青田上) 稿 遺

本願

○ おい絶対的愛こそ人類本心の願ひである。  
 自己を愛する如く自己以外の萬物を愛せ、無條件にしかも隣人として。  
 この願ひの完成に自己に與へられた全生命を捧げよ。

○ 雄大なる天地に生をうく己を見よ、たゞ一ヶの存在に非ずして無始無終の我なるを知らん。己の身中に高鳴る血潮はこれは長き祖先の結晶には非ざるや、又この双腕の熱と力は來るべき後者への贈物には非ざるか。

○ 大いなる生命の連鎖を組織する自己自身を凝視する時、何ぞ貧たる一節鎖に過ぎざるや、然れど知れ、その一節鎖無くして之何の連鎖ぞ、あゝこの一節鎖は即ち大いなる一連鎖にして人類そのものなり。

○ 先自己を生かせ、強く確に、しかして自己の力にて何程か人類をより高き愛の立脚地に立たしめよ。  
 おい青春の若人よ共に務め勵め。

新田の寓居にて (四、四、五記)

写真は小菅武夫先生殉職六十周年 「小菅武夫君」復刻版 上小教育会 より

若宮学校

『諏訪形誌』 75~76ページ 「1 初等教育の始まり」

諏訪形村や小牧村の子どもたちが御所村の亮功学校まで通学することは遠距離で不便なことから、明治8年(1875年)、諏訪形村に「諏訪形学校」が開校されることになりました。当初は民家を借りた学校でしたが、その後子どもが増えたこともあって、明治10年(1877年)には、若宮地籍(荒神宮西側)に新校舎を建てることになりました。校舎の建設にあたっては、小牧村607円、諏訪形村672円85銭、枝村の須川163円31銭、合計1443円余の寄付金がありました。

翌年の3月には敷地面積426坪(約1400平方メートル)、建物延面積約42坪(約140平方メートル)二階建ての新校舎が完成して、同年5月に「智仁学校(ちじんがっこう)」と称して、開校しました。その後、明治15年(1882年)7月には校名を「若宮学校」と改名しました。



「若宮学校跡」の案内板

明治八年、諏訪形学校（智仁学校）が当地に開校し、諏訪形と小牧の六歳からの子どもたち百余名が通学していました。

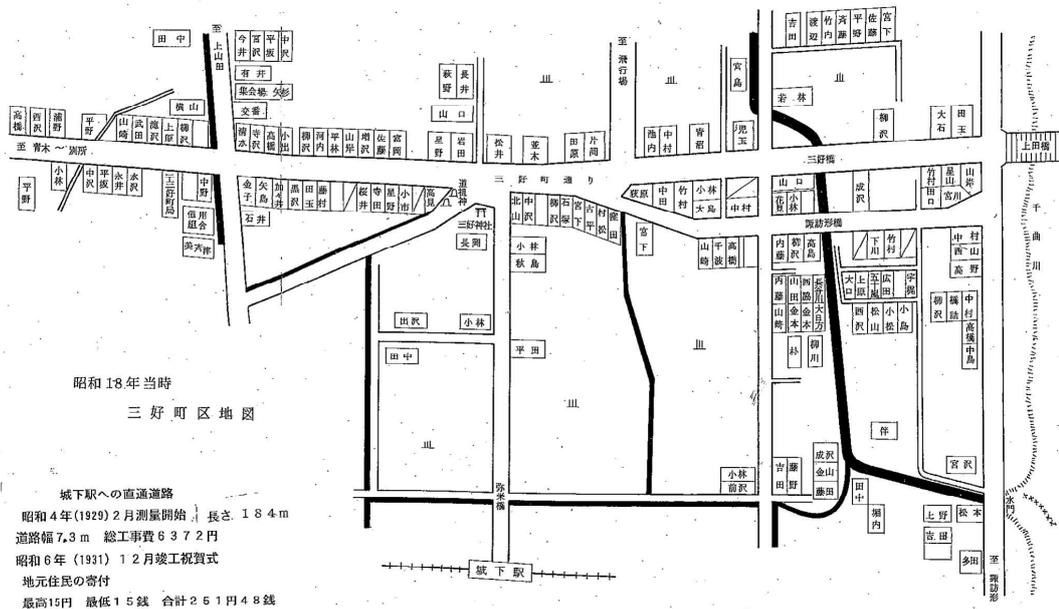
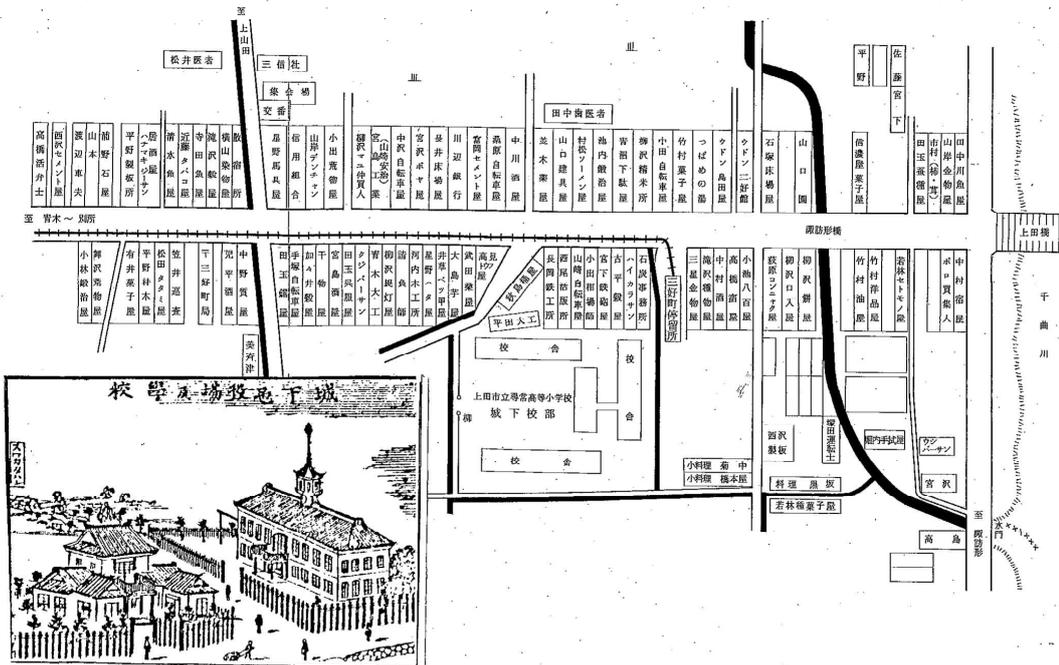
明治十年、当地の若宮地籍において新校舎の建設工事が始まり明治十一年三月に完成し、同年五月に開校しました。その後、明治十五年七月、この場所が若宮という地籍ということから若宮学校と校名が変更になりました。

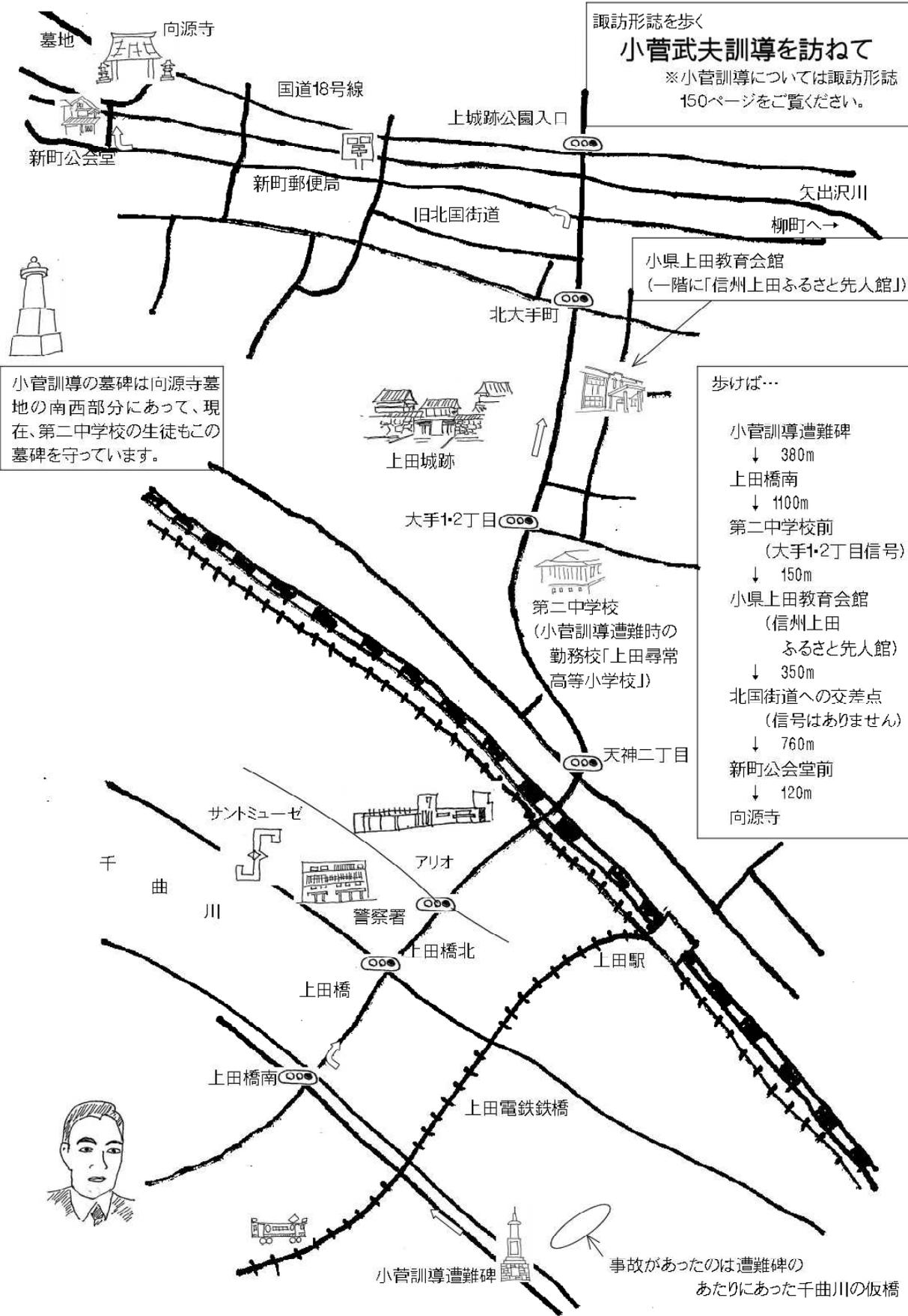
若宮学校は敷地が約一四〇〇平方メートル、床面積延べ一四〇平方メートル、二階建てで一階には職員室、二階は裁縫室を含め四教室がありました。建物の地番についての記録はありませんが、この若宮地籍にあったことは確かです。明治十九年通学制度が変わり、中之条に、城下と川辺地区七か村が一緒になった中之条学校が新たに開校したため、若宮学校は閉校となりました。

「諏訪形橋」と「城下尋常小学校」

『三好町誌』より

大正12年(1923)三好町区図





諏訪形誌を歩く  
**小菅武夫訓導を訪ねて**  
 ※小菅訓導については諏訪形誌  
 150ページをご覧ください。

小菅訓導の墓碑は向源寺墓地の南西部分にあって、現在、第二中学校の生徒もこの墓碑を守っています。

- 歩けば…
- 小菅訓導遭難碑
  - ↓ 380m
  - 上田橋南
  - ↓ 1100m
  - 第二中学校前  
(大手1・2丁目信号)
  - ↓ 150m
  - 小泉上田教育会館  
(信州上田  
ふるさと先人館)
  - ↓ 350m
  - 北国街道への交差点  
(信号はありません)
  - ↓ 760m
  - 新町公会堂前
  - ↓ 120m
  - 向源寺

事故があったのは遭難碑の  
 あたりにあった千曲川の仮橋